

子どもの救急について

毎年9月9日は救急の日です。今回は、子どもの救急について考えてみます。救急というと病気を思い浮かべますが、必ずしもそうではありません。あまり知られていないことですが、1才を過ぎると死亡原因の1位は事故です。日本は先進国の中でも病気による死亡は低いのですが、残念ながら事故における死亡は先進国でもかなり高い方です。事故の内訳では、小さな子では溺水、幼児・児童になると交通事故が最も多くなります。溺水が多いとは、信じられないかも知れませんが事実です。日本の場合は、室内の特に浴槽で起ることが特徴です。洗面器に5cm水が張ってあるだけで、溺水の可能性があると言われてます。子どもは、トイレでも風呂でもベランダでも、いつどこへ行くかわかりません。危険な場所に行かせないことが大切ですが、必ずしも目が届くとは限りません。事故防止のためには、鍵をかける習慣や子どもの力では開かないようにする工夫も必要です。

転落もよく起こる事故のひとつです。最近、洗濯機の上から落ちたお子さんが、続けて来院しました。洗濯機の上で遊んでいるわけではありません。たまたま、お風呂上りのお母さんが体を拭いているときに落ちたのです。それが、初めての寝返りだったのです。寝返りやつかり立ちも、いつできるようになるのかわかりません。床に置くのはかわいそうな気がしますが、落ちたらもつとかわいそうです。ベビーベッドからの転落もよくあるので、柵を常に入れておく習慣にしたいものです。

次は、交通事故のことを考えてみましょう。道路に飛び出して、はねられることだけではありません。子どもを乗せていて、衝突したり急ブレーキをかけたとしても事故は起こります。固定されていないければ、フロントガラスに突っ込む可能性もあります。チャイルドシート(装着のチェックや場所)、シートベルトの着用(もちろん後席も)を習慣づけましょう。

起こってから後悔するのが事故です。『後悔、先に立たず』のことわざ通り、起こってからでは遅いのです。子どもは、身を守る方法を見つけてくれるのは当然であり、事故防止に見つけるのは当然であり、事故防止は親の義務と考えましょう。

救急車の出動件数は、年々増加していることは、皆さんも御存知でしょう。中にはタクシー代わりに利用する人もいます。子どもの状態が重症であれば、救急車を呼ぶのは止むを得ません。子どもの状況を客観的に判断して、重症か軽症かの判断ができるような親御さんの学習も必要です。救急車を安易に使えば、次の人の対処が遅れる可能性が出てきます。命にかかわるような重症な人を優先したいものです。

もうひとつ大事なことは、救急蘇生です。地域によつて異なりませんが、救急車が到着するまでには5〜6分以上かかるのが現状です。成人では心肺停止が5分続くと死亡率は50%を超えてしまいます。救急蘇生の大切さから、クリニックでは毎年9月「あなたは大丈夫？子どもの救急蘇生！」と題して、人工呼吸や心臓マッサージの等の救急蘇生の体験会を開催しています。救急車到着まで、心肺蘇生を続けることが命を救うだけでなく、後遺症も減少させる可能性があります。希望があれば、消防署などで、救急蘇生の講習が受けることが可能です。家族のためお子さんのため、是非考えてみてください。

この記事を機会に、もう一度子どもの回りの危険度をチェックしてみよう。そして救急車の利用や救急蘇生についても、もう一度考えてみましょう。

ナビゲーター

小児科専門医

川村 和久

仙台市在住



医療法人社団かわむらこどもクリニック医院長。日本の小児科サイトを運営する、言わずと知れた小児科専門医。『お母さん達の心配・不安の解消』を理念に、日々の診療にあたった。宮城県小児科医会理事。2001年には医師として大変名誉のある日本小児科学会パネリストとして選ばれる。

AERA(アエラ)臨時増刊号 日本初! かかりつけ医を探すガイド「日本の家庭医 08」(7月5日号)の町のお医者さん1435人の中で紹介される。
<http://www.kodomo-clinic.or.jp/>

★「太陽がど暑いもんで」 悠奈ちゃん(4歳)

Mamagon 04